

中島敦の作品に描かれた「女性」たち (5)

藤村 猛

はじめに

中島敦の『南島譚』以降の作品として、「名人伝」と「李陵」がある。『南島譚』の諸作品には、まだ女性が登場していたが、「名人伝」と「李陵」には、女性はほとんど登場しない。その理由としては、時期が戦時下の昭和十七年であり、女性がらみの恋愛があるとすると、それは時局がらまずいということがある。だが、それにしても、『南島譚』では、女性が登場し活躍していた。

次の理由としては、「李陵」は戦争を背景とした歴史物語であり、男中心故だとするものである。(同様に、「名人伝」も主人公紀昌の精進の物語である。)ただし、昭和十七年七月発表の『古俗』や、同年五・六月執筆の「弟子」の諸作品では、もう少し女性が登場する。ある種の特異な状況―例えば、戦場―であれば、女性が登場しない場合もあるが、この世は男性と女性で構成されており、歴史小説といえど女性の存在は無視できない。

本稿は、昭和十七年の夏以降の中島の作品や、それ以前の彼の作品に描かれた女性たちに注目し、「李陵」や「名人伝」で、何故、

女性の描写が少ないのか、どのように女性たちが描かれているかを考察していく。

一節以降、南洋行後の「弟子」や『古俗』および『南島譚』の諸作と、「李陵」・「名人伝」との比較から始め、南洋行後の昭和十七年夏以降の中島の状況を見ていく。また、彼の遺稿となったエッセイ、「章魚の木の下で」で彼の心情を考察し、この時期に描かれた女性像をまとめてみる。

一 「弟子」・『古俗』の女たち

「弟子」に登場する女性たちの中で一番目立つのは、作品の九章に描かれる衛の霊公の夫人・南子である。作中では、彼女は「淫奔」にして「才走つた女」とされる。孔子に嫌がらせをする女性でもあり、主人公の子路たちからは、妖婦として毛嫌いされている。また、彼女の紹介の文章は別として、容貌などの具体的な描写は少なく、ほとんどが孔子との関連で描かれている。だが、子路の嫌悪感にも関わらず、彼女の描写はそう悪くはない。例えば、孔子をみすばらしい牛車に乗せ、彼女が豪華な馬車に乗った時の描写に、「嬋妍たる

南子夫人の姿が牡丹の花のやうに輝く」とある。

南子と同様に、孔子たちの活動の邪魔をする女性として、魯の定公と孔子の間を離間させるために、斉から送り込まれた「歌舞に長じた美女の一团」（六章）がいる。が、南子よりも淡々とした描写で、量的にも少なく事実を述べたにすぎない。

最後に、作品の最終部（十六章）に登場する衛の孔叔圉の未亡人で、衛の亡命太子蒯聵の姉・伯姫がいる。（ちなみに、この女性は、南子とともに、『古俗』の「盈虚」にも登場する。）彼女は「女策士」であり、

愛憎と利欲との複雑な経緯があつて、妙に弟の為ばかりを計らうとする。夫の死後頻りに寵愛してゐる渾良夫なる美青年を使うとして、弟蒯聵との間を往復させ、秘かに現衛公逐出しを企んでゐる。

その後、弟たちとクーデターを起こし、正義派の子路を惨殺させる。ただ、彼女の描写は、前出の引用部分程度であり、彼女の内面描写はない。南子とともに、作品の進行に不可欠ではあるが、そつけない描写であり、彼女たちは脇役にすぎない。いずれも、主人公たち（孔子や子路たち）に、死や追放をもたらすマイナスの存在である。

続いて、『古俗』の二作品（「盈虚」・「牛人」）を見ていく。

「盈虚」に登場する女性としては、「弟子」に引き続いての南子がいる。この作品の主人公である蒯聵が皇太子の時、南子の暗殺を謀り、失敗し亡命する。その暗殺を謀る場面で、南子は蒯聵に対して、次のように怯える。

太子の妙なそぶりに夫人は気が付いた。太子の視線を辿り、室の一隅に怪しい者の潜んでゐるのを知ると、夫人は悲鳴を挙げて奥へ跳び込んだ。其の声に驚いて霊公が出て来る。夫人の手を執つて落着けようとするが、夫人は唯狂気のやうに「太子が妾を殺します。太子が妾を殺します」と繰り返すばかりである。才気に溢れた女性の姿はここにはない。彼女は作品の途中で死んでしまい、その死は単なる事実として報告される。

その後、「弟子」でも描かれた伯姫たちによるクーデターがあるが、「盈虚」の方は、蒯聵（即位して、衛の荘公）側からの描写が中心となる。

次の女性としては、クーデター後の作品後半で、異種族の女――「際だつて髪美しく豊かな女」――が登場する。即位後、乱行を重ねる荘公は、寵姫のために「女の髪を根本から切取らせ」、女を夫の元に帰す。

丸坊主にされて帰つて来た妻を見ると、夫の己氏は直ぐに被衣を妻にかずかせ、まだ城楼の上に立つてゐる衛公の姿を睨んだ。役人に咎打たれても、容易に其の場を立去らうとしないのである。

この夫の恨みが、作品最終部での荘公殺害に結びつく。

衛の国の乱れに乗じて、晋軍が侵入してくる。戦いを放棄して城を落ちた荘公は、「赤銅色に濁つた月」に照らされた原の「とつつきの一軒に匍い込む」。そこに、この己氏がいた。

男は、部屋の一隅に蹲まつてゐた一人の女を招いた。其の女の顔を薄暗い灯の下で見たと、公は思はず雞の死骸を取り落し、

殆ど倒れようとした。被衣を以て頭を隠した其の女こそは、紛れもなく、公の寵姫の髻のために髪を奪はれた己氏の妻であった。

直後に己氏によって、荘公は殺害される。己氏の女は、夫のように行動したり喋らないが、その存在が因果応報とはいえ、荘公を滅ぼすのである。荘公にとつては、滅びの象徴とも言えよう。

これは、「牛人」で言えば、作品最後の場面に展開される、豎牛による叔孫豹の死の場面を連想させる。この時、豎牛は単なる殺人者ではなく、「世界のきびしい悪意」の体現者であり、叔孫豹は、彼に「遜つた懼れ・運命的な畏怖感」を抱く。（荘公も、それに近い思いを、死ぬ時に抱いたのかもしれない。）

「牛人」に登場する女の一人は、豎牛を生んだ母親である。作品冒頭で、次のように紹介される。

魯の叔孫豹がまだ若かつた頃、乱を避けて一時斉に奔つたことがある。遂に魯の北境庚宗の地で一美婦を見た。俄かに懇ろとなり、一夜を共に過ごして、さて翌朝別れて斉に入った。斉に落着き大夫国氏の娘を娶つて二児を挙げるに及んで、曾ての路傍一夜の契などはすっかり忘れ果てて了つた。

十数年後、庚宗の女が子供を連れて、叔孫豹を訪れる。その子（豎牛）が、かつて夢で見た自分を救う牛男とそっくりであることから、叔孫豹は豎牛を重用する。その結果は、豎牛による叔孫豹の子供たちの排斥や死であり、叔孫豹自身の飢え死にである。もともと荘公とは違い、ストレートに因果応報の死とは言い難い。だが、「盈虚」と同様、主人公の死の原因として女はいる。

二 『南島譚』の女たち

『南島譚』の諸作品に登場する女性については、詳細は拙稿^{注①}を見ていただくとして、重複するかもしれないが、概略を確認しておきたい。

女性の登場する作品として、「夫婦」・「夾竹桃の家の女」および「雞」に注目する。いずれも、中島に悪意はなかったとしても、南洋の女性は淫風で、官能的だとの偏見のある作品だとも言える。中島は「雞」で、次のように言う。

アンガウル島へ燐鉍掘りに狩出されて行く良人を浜に見送る島民の女は、舟の纜に縋つてよよと泣き崩れる。夫の乗つた舟が水平線の彼方に消えても、彼女は涙に濡れたまま其の場を立ち去らない。誠に松浦佐用姫も斯くやと思はれるばかりである。

二時間後には、しかし、此の可憐な妻は、早くも近処の青年の一人と肉体的な交渉を持つてゐるであらう。

これは、そういった傾向はあるにしても、南洋の女性への偏見ではなからうか。特に「夫婦」（『南島譚』）のエピソードには、醜態にして滑稽な描写が多い。南洋の人々の不可解さが『南島譚』の一特色だとしても、書きすぎだと思われる。

続いて、女性の官能性についてだが、「夾竹桃の家の女」に、次のような描写がある。主人公の「私」が外出先の某家で、若い細君から見詰められ、そこから去ることができない場面である。（実際の中島の体験との相違については、省略する。）

いや、まだもう一つ、そうやって無言で向ひ合つてゐる中に次第に微かながらエロティツシユな興味が生じて来たからでもあつた。実際、その若い細君は美人といつて良かった。(中略)

稍、反り気味な其の姿勢で、受け口の唇を半ば開いた儘、睫の長い大きな目で、放心したやうに此方を見詰めてゐる。私は其の目を外らすことをしなかつた。(中略) 女の浅黒い顔に、ほのかに血の色が上つて来たのを私は見た。

こういった官能の連想的描写は、未発表の「妖氛録」——「古俗」系の作品と推測される——にもある。例えば、ヒロインの夏姫の次のやうな描写である。

つくり物のやうに静かな顔に、時として、不意に、燃えるやうな華やかさの動き出すことがある。雪白の冷たい石籠の内に急に灯がともされたやうに、耳朶は見る／＼上気して、紅玉色に透り、漆黒の眸子は妖しい潤ひに光つて来る。内に灯のともつてゐる間だけ、此の女は世の常の女ではなくなる。

この作品の読みどころは、夏姫の妖艶さと、それに振り回される男たちの「莫迦げた踊り」への慄然感と「妙なをかしさ」にあるが、「古俗」に貫流していた、歴史の重みと「懼れ」が不足している。いずれにしても、『南島譚』では、南洋人の不可解さはあるにしても、古代中国を舞台にした作品(特に、「弟子」や「李陵」)のとき重みはない。また、不可解さに関連して女性が描かれているが、その描写には軽薄の気味がある。

三 「李陵」・「名人伝」の女たち

「李陵」に登場する女性たちは、作品の量の割には少ないだけでなく、『古俗』よりも、女性の重要度は低い。以下、注目すべき女性たちを紹介する。

最初に紹介したいのは、一章の李陵の遠征中の陣中の女たちである。孤軍である李陵たち遠征軍は、匈奴に攻められ苦闘していた。そういうある夜の出来事である。

此の夜、陣中視察の時、李陵は偶々、或る輜重車中に男の服を纏うた女を発見した。全軍の車両について一々取調べた所、同様にして潜んでゐた十数人の女が捜し出された。(中略) 李陵は軍吏に女等を斬るべくカンタンに命じた。彼女等を伴い来たつた士卒については一言のふれる所も無い。潤間の凹地に引出された女共の疝高い号泣が暫くつゞいた後、突然それが夜の沈黙に呑まれたやうにフツと消えて行くのを、軍幕の中の将士一同は肅然たる思ひで聞いた。

漢軍の敗北(全滅)は目前であつた。『漢書』の「李陵伝」では、兵の士気を高めるために、女たちを斬つたとあるが、引用文中の「女等を斬るべくカンタンに命じた」辺りに、戦いの厳しさは分かるものの、李陵の酷薄さが暗示されているのかもしれない。

次の女性は、誤解から武帝によつて一族を殺され、李陵が悩んだ末、漢を見限り、単于の娘をもらう、李陵の妻である。彼女は、次のように描かれる。

彼の妻は頗る大人しい女だった。未だに良人の前に出るとおぼろ／＼してろくに口も利けない。しかし、彼等の間に出来た男の児は、少しも父親を恐れないで、ヨチ／＼と李陵の膝に葡上つて来る。その児の顔に見入りながら、数年前長安に残してきた――そして結局母や祖母と共に殺されて了つた――子供の佛を不図思ひうかべて李陵は我知らず惘然とするのであつた。

（三章）

李陵の妻は単于の娘にも関わらず、政治などの前面に出てくる女性ではなく、李陵との夫婦関係についても、特に記述はない。李陵はこの妻に、あまり愛情を抱いていないようだ。（李陵自身の心情の変化〈絶望や苦悩など〉もあろうが、妻の父――単于――には、李陵は「男だ」と感じているし、その兄には「友情のやうなもの」を感じている。）

以上のように、「李陵」の中では、女性は重きを持っていない。次に、短編「名人伝」だが、女性としては、主人公・紀昌の妻がいる。が、李陵の妻と同様、作品の中ではたいした役割を持っていない。次の引用は、紀昌が弓の上達のために、師である飛衛に瞬きせざることを命じられた場面である。

紀昌は家に帰り、妻の機織台の下に潜り込んで、其処に仰向けにひっくり返つた。眼とすれ／＼に機躡が忙しく上下往来するのをじつと瞬かずに見詰めてゐようといふ工夫である。理由を知らない妻は大いに驚いた。第一、妙な姿勢を妙な角度から良人に覗かれては困るといふ。厭がる妻を紀昌は叱りつけて、無理に機を織り続けさせた。

紀昌の一途さと妻のまともぶりが分かる、滑稽感がただよう描写である。次の引用も、弓の妙技を別にすると、よくある夫婦喧嘩の一シーンであろう。

二月の後、偶々家に帰つて妻といさかひをした紀昌が之を威さうとて鳥号の弓に慕衛の矢をつがへきりりと引絞つて妻の目を射た。矢は妻の睫毛三本を射切つて彼方へ飛び去つたが、射られた本人は一向に気づかず、まばたきもしないで亭主を罵り続けた。

「名人伝」は常識を越えた話であり、紀昌の名人への超人的な精進を描いたものであるから、普通の夫婦を基準にしても意味がないかもしれない。が、紀昌の妻は、李陵の匈奴の妻と比べると、庶民的な性格を持っていて、むしろ、「夫婦」（『南島譚』）の妻・エビルに近い。だが、紀昌の行動や人生を支配するような大きな存在でも、因果応報の原因になるような存在でもない。

以上、「李陵」と「名人伝」の女性たちを見てきたが、両作とも、女性の描写は少なく、活躍もない。ただ、両作ともに、主人公の妻が描かれているのは注目される。

だが、そこには、いわゆる夫婦愛の描写はない。女性の不倫を描いた『南島譚』の「夫婦」に、主人公と愛人・リメイとの間に夫婦愛がある。元々、シャイな性格の中島は、自分たちを連想させる夫婦像は描かない。あるとすれば、それ以前の作品、「光と風と夢」や『古譚』の「木乃伊」であろう。

次に、「木乃伊」の夫婦愛を紹介する。主人公パリスカスがエジプトへ行き、メンフィスで木乃伊と対面し、自分の前世――ブターの神

殿の祭司―を思い出す。そこで登場する妻の描写である。

ふと、自分が神前に捧げた犠牲の牡牛の、もの悲しい眼が、浮かんで来た。誰か、自分のよく知つてゐる人間の眼に似てゐるなどと思ふ。さうだ。確かに、あの女だ。忽ち、一人の女の眼が、孔雀石の粉を薄くつけた顔が、ほつそりした身体つきが、彼に馴染みのしぐさと共に懐かしい体臭を伴つて眼前に現れて来た。あ、懐かしい、と思ふ。それにしても夕暮れの湖の紅鶴の様な、何と寂しい女だらう。それは疑もなく、彼の妻だつた女である。(中略)自分は酷い熱で床の上に寝てゐるらしい。傍には妻の心配さうな顔が覗いてゐる。その後ろには、まだ誰やら老人らしいのや子供らしいのがゐる様子である。ひどく咽喉が渇く。手を動かすと、直ぐに妻が来て、水を飲ませて呉れる。それから暫く、うとくする。眼が覚めた時は、もうすつかり熱がひいてゐる。うす眼をあけて見ると、傍で妻が泣いてゐる。南洋行後の作品には見られない、妻の情緒的描写である。ここには夫婦愛がある。(因みに、同シリーズの「山月記」の李徴も、妻子のために就職するし、虎になつた後も妻子を強く思つている。) 相対的に、「李陵」や「名人伝」では妻はいても、話の中で大きな役割も、主人公たちとの強い絆も、彼女らの心情的描写もない。これは、激しくなる戦時下への配慮や男中心の世界故にもよろうが、やはり中島自身の状況も影響しているのではないか。次節で、当時の彼の状況を見ていく。

四 『南島譚』以降の中島

中島は昭和十七年三月に南洋から帰還し、病気の末、五月頃から創作に没頭する。六月頃に「弟子」を、八月頃に『南島譚』の諸作を、十月頃に「名人伝」や「李陵」を執筆している。第一作品集『光と風と夢』が八月月上旬に、第二作品集『南島譚』が十一月月中旬に出版される。出版社からの原稿の注文も多く、七月には、作家として生きていくことの決意を教え子たちに知らせている。当然のことながら、それは南洋庁の辞職を意味する。八月には辞表を出し、九月七日付で許可が出るが、交付されたのは十一月中旬以降であつたらしい。

律儀な性格の中島は辞めるのに際して、仲介してくれた友人に頭を下げてゐる。(釘本久春氏の回想^{注②})

が、七月には原稿料を妻に与え、着物を買つたり、一家で里帰りをしてゐる。今まで苦勞を掛けた妻に対する思いやりであろう。里帰りから東京へ早く旅立つ中島の姿に、妻のタカ夫人は、「何か近寄り難いような、遙かな人のように見えた^{注③}」らしい。中島は、意識の上からも、作家として存在し始めたのではないか。また、この妻の里帰り中、中島は、大量の手紙や草稿を妹に焼却させる。次の文章は、その妹の折原澄子氏の回想^{注④}である。

その姉上の留守中の一日、行李いっぱい原稿の書損じ等燃やす様命令されました。躊躇していると、えらい剣幕で叱られ、真夏とは言え、風呂が相当に温む程の量でした。兄上にとつて

は不本意なものの整理だったのでしょうが、燃やし終えた時、「たか（義姉の名）が居たらうるさいから」の一言に、はっとしました。義姉上なら泣いて止めたでしょう。そっと隠したでしょうにと、後悔する事頻りでした。

中島は、南洋庁への辞表提出・苦勞をかけた妻へのいたわり・原稿の焼却等によって、彼なりの過去との決別を図ろうとしたのではないか。彼は、徐々に作家として生きようとし、そういうオーラを出し始めている。

以上のように、中島は一見順風満帆のようであるが、時代の悪化と共に、彼には健康への不安があった。前出の折原氏の回想にも、「夏はいつも元気な兄上ですが、その時はまさに意気軒昂、しかし体力には予感があるのか頻りに急いでおられました。」とあり、別の箇所で、「何かに憑かれた様に机に向かっていた」ともある。中島自身、健康への不安もあり、一心不乱の創作になつたのではないか。中島を文壇に紹介した深田久弥も、中島の健康について「南洋から帰って私の家へ訪ねてきた君は、やはり健康はあまり勝れないようであった^{注⑤}」と述べている。体調によっては、意気軒昂に見える日もあれば、そうでない日もあつたらう。だが、健康や時局だけが中島の悩みだつただらうか。次に紹介するのは、憂鬱な顔を見せる中島の姿である。

回想する田辺秀穂氏は、南洋（サイパン）での知り合いで、四月に帰国していた。

ところが、全くの偶然であつたが、ある六月の新緑の頃、彼を訪問する結果となつて了つたのである。（中略）

その日の中島君は非常に沈みがちで疊ばかりを見つめていて、私もそのことに直ぐに気付いたので起ち上つた。「今から会合があるので……」といった彼の言葉にも、いつもの明快な調子がなく、いかにも自信のない言葉として消えた。二人はそのまま京王線のある駅で別れた。

^{注⑥}この回想では、中島の憂鬱さの原因は分からない。創作関係でも、健康関係でもなからう。別のものが想像される。

この件とは関係ないかもしれないが、友人の氷上英廣氏の書簡^{注⑦}昭和十七年八月二十八日―に気になる文章がある。（氷上氏は、中島の二高時代からの親友である。）

解決めでたしめでたし、前の返事出してからも、どうなることかと思つて落着けなかつたね。ニイチェなんか訳してゐる御陰で、何でもひとひねりひねくつたことしか自分には表現能力がなくなつて了つたのだ、心にもなく自分は人を傷ける人間だと考へて、頗るシヨゲタ。妙なもので、さう思ふと、出したばかりの前の返事さへも自信がなくなつて、まだ意が足らないやうに思はれてくる。そこで不安と戦ふために、こんな歌を詠んだ。（中略）

君がこのまゝ、全然沈黙する最悪の場合さへ思はれ
ひさかたの空ゆく星の相離かるごとく別るゝにいかで堪ふべき

悲痛なものだ、今から思ふと。（中略）

おふくろは君がユカタがけでやつてきて、「あつて話せばなんでもないんだよ」と云つてゐる夢を見たさうだ。

現在、氷上氏の「前の返事」やそれに対応する中島の書簡もなく、真相は不明だが、後年、氷上氏はこの件を尋ねられて、次のように言っている。^{注⑧}

中島の最後の年、十七年には彼と会っていません。南洋の土産、椰子の葉の団扇を貰ったのですが、これは送ってくれたものかと思えます。その時の私の手紙で「問題が解決してよかったです」旨のことが書いているようですが、女性問題については、しかしこのことはお話ししないでおきます。

同様なことを、中島と親しかった北畠八穂が、次のように触れている。^{注⑨}

大変な教養人で、太宰とは違ったものがあり、私はもつとその作品が売れて欲しいと思います。ただ女性関係でちよつと忠告したことがあります。本当に惜しい人を亡くしたものです。

軽率な推測は慎むべきだが、どうもこの時期、中島に女性問題が生じたのではないかと思われる。ただ、この件に関する書簡や回想等が他にないので、想像の域を出ないが、氷上氏の「頗るシヨゲタ」等の書きぶりや、北畠氏の文章中の「ちよつと」という言い方から、深刻なものだったとは思われない。が、やはり、夫婦の間に波風が立ったのではないか。

元々中島は、気に入りの教え子たちに会うことや、彼女らの写真などを求める性格であり、特に南洋行中には、それが目立つ。その後、帰国してからも、彼は複数の卒業した元教え子たちに、会いたいの手紙を出している。

タカ夫人と中島の愛情は、南洋行中に相互確認されていたが、帰

国後の中島の行状に、タカ夫人も動揺したのかもしれない。時期は違ふかもしれないが、「私も子供さえいなければ別れたと思ったこともあります」とは、タカ夫人の奥底での本音であろう。また、この夏、夫人にとって、中島は「何か近寄り難いような、遙かな人のように見えた」のである。そういう時に起こった波風であろう。しかし、前述したように、中島と他の女性たちと関係は、そう深刻なものではないと思われる。かつて、他の女性との仲を疑われたらしい中島は、夫人に次のように書いている。

○俺のことをどんなに疑はうと勝手だが、俺が死んでから、杉本にでも誰にでも俺のことを聞いて見るがい、。さうすれば判るだらう。(昭和十一年六月二十四日 タカ夫人宛)

ただ、時節柄、元教え子とはいえ、未婚の年頃の女性たちとのデートはまずいと自覚は、中島にあったようである。

いづれ、又、お会ひした時に。(どうも、僕が行くのは、君の迷惑になりさうだな?)

これは、かつて原稿の清書をしてもらった鈴木美江子氏あての書簡―昭和十七年十月二十一日―中の一節である。

昭和十年代前半であれば問題でなかったとしても、戦時下である。そういった状況が、前出の氷上氏や北畠氏の忠告になったのではないか。いづれにしても、中島の身の回りに、また、心情レベルに「女性」がいたのは確かであり、この時期の執筆である『南島譚』に、何らかの関係があったかもしれない。

だが、十月中旬以降、持病の喘息の発作が烈しくなり、健康が害されてくると、外出もできなくなり、彼の頭(生活)は創作が中心

となり、女性を顧みる余裕はなくなっていくたであろう。この時期の作品が「名人伝」や「李陵」である。一途な主人公が両作品の共通項となる。

妹の澄子氏の回想にも、病床で「書きたい、書きたい」と苦悩する中島の姿が紹介される。病床で、中島は創作に執念を燃やす。だが、書けない。そんな良人の姿を見て、タカ夫人は献身的に看病したに違いない。南洋行中に中島が見せた書けない苦しみの、より強い（心理的）状況の再現である。

中島は、十一月中旬には近所の病院に入院し、翌十二月四日に死去する。タカ夫人との関係は元に戻ったと思われる。

五 「章魚木の下で」の中島

「章魚木の下で」は、『新創作』昭和十八年新年号に発表されたエッセイであり、中島の遺稿である。『新創作』編集部が、昭和十七年十一月二十八日に、中島に原稿受け取りの葉書を出していることから、十一月・下旬の執筆と推測される。

内容は、時局と文学との関係を論じたものであるが、その論調の強さは注目に値する。当時の文壇の雰囲気から言えば、正論にして時局に迎合していない潔さがある。

中島は、まず、自分が文壇の状況や世相をよく知らず、「南洋果け」していると前置きして、当時の風潮―戦争と文学の合致―について批判し始める。

戦争は戦争。文学は文学。全然別のものと思ひ込んでゐたのだ。

己に課せられた実務が目下の所第一の急務で、他は顧みる暇が無い。稀に暇があつた時にのみ些かは文字を連ねることもあつたが、必ずしも文学作品といふ意識を以てではない。書くものの中に時局的色彩を盛ろうと考へたこともなく、まして、文学などといふものが国家的目的に役立たせられ得るものとは考へもしなかつた。

彼はまず、遠回しな表現であるが、戦争と文学を峻別する。文学の自律に言及したと言つてもいい。彼には、当時の文学の「国家的目的」への迎合批判が根底にある。

続いて、文学者の在り方について批判する。

国民の一人として忠実に生きて行く中に、もし自分が文学者なら其の中に何か作品が自然に出来るだらう。しかし出来なくても一向差支へない。一人の人間が作家にならうとなるまいと、そんな事は此の際大した問題ではない。（中略）

併し、全然書けなくなつたり、自己の作品に不安を感じたりするやうな人迄が今迄文学をやつて来たからといふそれだけの事実に引きずられて、無理に書齋に嚙りついてゐることは無い。人手の足りない此の際、宜しく筆を捨てて何等かの実際的な事に就いた方が、文学の為にも国家の為にもならうと思ふのである。

「しかし出来なくても一向差支へない。一人の人間が作家にならうとなるまいと、そんな事は此の際大した問題ではない。」確かに、それはその通りのだが、それは、中島自身に跳ね返るものである。つまり、書けなくなつても「何等かの実際的な仕事」に就ける文

学者は、問題はない。中島はどうなのか。彼自身、実務に就くことは体調が許さないだろう。「章魚木の下で」は、病床中の執筆である。彼は、体調が元に戻ると思っていたのか。

また、最初の引用文中の「己に課せられた実務が目下の所第一の急務で、他は顧みる暇が無い。」とは、どういうことだろう。七月には、南洋庁に辞表を提出して、創作に専念しようとした。それとも、これは南洋行前の横浜高女時代か、南洋行中を指すのか。だが、前者の頃には戦争は起こってはず、戦争と文学の關係は話題になっていない。南洋行中には、中島は創作していない。これは、一種のレトリックだと考える。「章魚の木の下で」の冒頭文、「南洋群島の土人の間で仕事をしてゐた間は、内地の新聞も雑誌も一切目にしなかつた。」と同種の表現である。ここは、彼の心情の高揚を読むべき所ではないか。

力点は、「一人の人間が作家にならうとなるまいと、そんな事は此の際大した問題ではない」にある。いわば、作家を、自分自身を、歴史のレベル（相）から見たのである。ひよつとすると、創作（文学）を別にすると、もはや中島の頭の中には、自分のことはないのかもしれない。

斯ういふ粗い考へ方は余りに文学を見縊つたやうに見えるだろうか。私自身としては毛頭そんなつもりは無い。却つて文学を高い所に置いてゐるが故に、此の世界に於ける代用品の存在を許したくないだけのことである。食料や衣服と違つて代用品はいらぬ。出来なければ出来ないうで、ほんものの出来る迄待つはかばか無いと思ふ。

ここには、文学のあるべき姿や、文学者の本来の目標が語られる。ほんものを書くこと、それが文学者の為すべきことであり、文学に代用品はいらないのである。

ま と め

昭和十七年秋以降、（それ以前よりもより強く）、中島は「ほんもの」を書こうとする。その際、残された時間のなごの予感が、女性を描かせなかつたのではないか。作品の完成を目指す切迫感が、この時期は「男たち」に集中し、自己の生の問いかけと絡み合い、あるべき「男」——ギリギリの生を生きる李陵や司馬遷たち——を描くことで、手一杯だったのではないか。つまり、苦悩の中にいる男たちを描ききることが、中島にとつて優先課題だったのである。（もちろん、「名人伝」のように一途だが、どこかユーモアのある作品も描いている。ここには、シリーズものの一つという意識があつた^{注⑩}うだ。）

夏時分に構想されたとされる「吃公子」のメモに、次のような一節がある。

無報償の愛などとは、古人の書の中にしか無いこと。いや、それも甘い現代人のよみそこなひだ。卑しい人間が、觀念の上では、人間といふものを如何に貴いものと考へてゐるか。（中略）

古人は愛が利己の現れにすぎぬことをハッキリ示してゐるのではないか。

これが、どこまで作品中で重みを持つ考えかは分からないが、こういうシニカルな気分が中島にあったろうし、同時に、「古俗」などの女性への「懼れ」から離れ、『南島譚』の諸作のような傾向が、「吃公子」のこのような考えを呼んだのかもしれない。

だが、中島は既に「弟子」で、子路と孔子の愛情を描いている。「李陵」で言えば、蘇武の「譬へやうも無く清冽な純粹な漢の国土への愛情（それは、義とか節とかいふ外から押しつけられたものではなく、抑へようとして抑へられぬ、こん／＼と常に湧出る、最も親身な自然な愛情）」（三章）が該当しようし、それによって、より苦悩する李陵が描かれる。中島にとって、人間の愛情は在るものであり、むしろそこに到達しない、または裏切った（られた）人間の苦悩に、眼が向いたのではないか。

私的レベルで言うと、喘息に苦しみ、妻の献身的な愛情に触れたであろう中島は、愛イコール利己心とは違う方向に向かったと、想像される。たとえ妻に不満がなく、他の女性に眼が向いたとしても、少なくとも、妻の自分への愛情は実感される。自分自身は揺れたとしてもである。再度の愛情の実感である。あたかも「木乃伊」の中で描かれた、主人公の妻への慕情・回帰が生じたのではないか。が、中島は、遺稿となった「李陵」の完成に全身全霊を傾ける。

戦争という「絶対者」の重みと死の予感、あるべき「男」像創作への切迫さにより、作品中の女性像は、急速にその姿を隠していった。そして、新たな像を造ろうとする前に、中島の作家としての存在は、早すぎる死を迎え終了したのである。

注① 「中島敦の作品に描かれた『女性』たち（4）」（安田女子大学紀要

36 平成二十年二月）

② 「敦のこと」（『中島敦研究』筑摩書房 昭和五十三年十二月）

③ 「思い出すことなど」（『中島敦 光と影』新有堂 平成元年三月）

④ 「兄への便り」（『中島敦全集 別巻』筑摩書房 平成十四年五月）

⑤ 「中島敦の作品」（『中島敦全集 別巻』筑摩書房 平成十四年五月）

⑥ 「ステイヴンソン」のいない島」（『中島敦研究』筑摩書房 昭和五十三年十二月）

⑦ 「中島敦全集 別巻」（筑摩書房 平成十四年五月）所収。

⑧ 「中島のこと」（『中島敦 光と影』新有堂 平成元年三月）

⑨ 「土曜日の先生のこと」（『中島敦 光と影』新有堂 平成元年三月）

⑩ 「断片二十九」に、「譚藪拾遺」の一番目の作品として、「名人伝」が記載されている。

中島敦の作品や書簡などは、『中島敦全集』（筑摩書房 平成十三～十四年）による。